

美濃桃山陶の聖地、その謎を解く

大萱古窯跡群発掘調査

窯道具の記号「千」

表紙や下の写真をご覧ください。書かれている記号が読めますか。表紙や写真1は漢字の「千」、写真2はカタカナの「オ」のような記号が書かれています。何かピンと来ませんか。もしかしら「千」は、茶聖とも称せられる「千利休」の「千」ではないか、と。

記号が書かれているものは、窯道具の「千」で「千」です。匣鉢とは陶磁器を焼くときに、降灰の付着を防ぐために用いられる容器のこと。「千」や「えんじ」なども呼ばれます（図1参照）。

匣鉢にみられる記号は、陶工のサインともいわれられており、同じ陶工や陶工集団が付近の窯を使用していた可能性や、注文者を判別するために記した可能性などが想定されます。

久々利の大萱古窯跡群（牟田洞古窯跡・窯下古窯跡・弥七田古窯跡）は、美濃桃山陶の最盛期の窯跡であり、当時茶の湯を司っていた千利休らが注文者として関わっていたとしても不思議ではありません。



写真1 漢字の「千」のような記号
窯下古窯から出土した匣鉢片
(左右とも)



写真2 カタカナの「オ」のような記号
左) 牟田洞古窯から出土した匣鉢片
右) 窯下古窯から出土した皿片

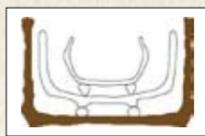


図1 茶碗と香炉を匣鉢の中に積んだイメージ図

美濃桃山陶の聖地として

久々利大萱地区にある牟田洞古窯跡・窯下古窯跡・弥七田古窯跡の3つを合わせて大萱古窯跡群と呼んでいます。安土桃山時代から江戸時代の初め頃まで、優れた桃山陶を生み出して世に送り、日本の文化芸術に大きな影響を与えた窯場です。

昭和5年に荒川豊蔵が牟田洞古窯跡で古志野の陶片を発見したことで、約400年前に志野が可児で焼かれていたことを明らかにしました。豊蔵らが古窯の調査をしたものの、本格的に考古学的な調査は行われておらず、400年前の



大萱古窯跡群窯跡位置図

高まる関心

数年にわたる調査では、牟田洞古窯跡、窯下古窯跡を発掘し、まずは、窯跡の数・構造、周辺施設（作業場等）を特定することが期待されています。そして桃山陶の変化の過程や産地と消費地（城館跡・都市遺跡）の結び付きなどにも、遺跡の性格を明らかにしていきます。さらには、考古学・窯業史・茶道史・美術史などさまざまな分野の研究の参考となり、桃山文化の一端に光を当てることがも期待されています。

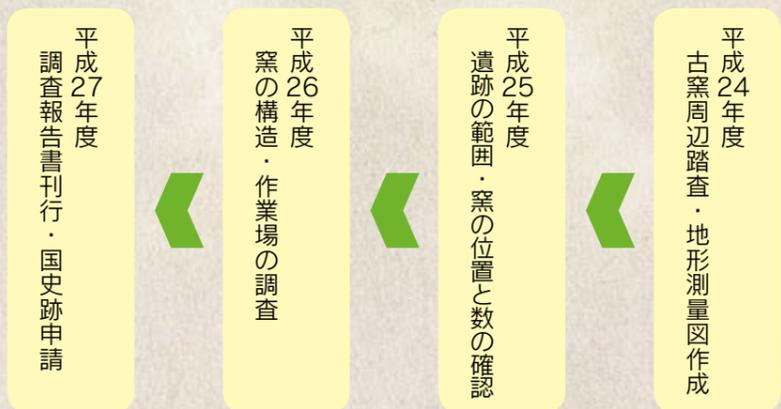
そのため、地元関係者以外にも著名な研究者に大萱古窯跡群調査・保存・整備指導委員会（以下、指導委員会）の委員になっていただいています。



平成25年度牟田洞古窯跡からの出土品に関心を寄せる委員

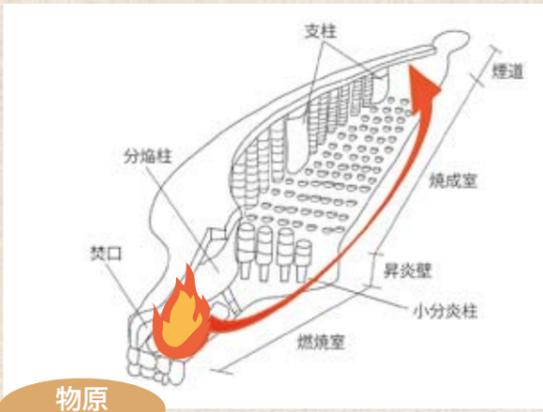
様子がよく残されている貴重な遺跡です。牟田洞古窯跡を含む土地が市に寄贈されたことを機に、市教育委員会では平成24年度から調査を始めました。極力景観を損なわないように窯などの保存を行い、「美濃桃山陶の聖地」として、地域の誇りづくりのために一体的な整備を進めていきます。

牟田洞古窯跡・窯下古窯跡調査スケジュール



窯の革命「大窯」

美濃桃山陶を焼いた窯は、大窯と呼ばれ、当時の窯としては革命的な窯でした。



物原

大窯以前は、山の斜面を溝状に掘って作る地下式または半地下式の窯と呼ばれる窯で製品は焼かれていました。窯窯では、地下の水分の影響を受けると、燃焼温度が適切に上がらなったり、製品を直接重ねて焼くため、焼くときに倒れたりしていました。そのため、窯は改良を重ね、ついに大窯という窯が作られます。

大窯は、地上式または半地上式に作り、壁や天井などをトーム状に作りつけます。焚口で火を焚き、分炎柱で天井を支え、小分炎柱を備えて窯全体に熱を効



大量の匣鉢が斜面に廃棄されている牟田洞古窯跡の物原

窯は多くの製品を焼いた際には何割かの失敗品（歪んでしまったり、割れてしまったもの）が出ます。失敗品は窯から取り出した後に選別され、窯の下の斜面に捨てられたりします。その失敗品や匣鉢のような窯道具などを廃棄したところを「物原」といいます。

【指導委員会 委員】

役職	氏名	職場・役職
委員長	榎本 徹	岐阜県現代陶芸美術館館長
副委員長	田口誠一	久々利自治連合会長
副委員長	藤澤良祐	愛知学院大学文学部教授
	赤沼多佳	三井記念美術館参事
	原 憲司	可児陶芸協会会長
	福島金治	愛知学院大学文学部教授
	小野健吉	奈良文化財研究所副所長
	伊藤雅章	東京国立博物館学芸部研究部長
	平尾政幸	財団法人京都市埋蔵文化財研究所
	岩井立弥	多治見市文化財保護センター
	林 順一	土岐市教育委員会文化振興課
	守谷宏一	大萱組 代表

※次ページに、委員の方からこの調査にかける思いや期待すべくご自身のメッセージをいただきましたので、紹介します。

美濃桃山陶の聖地

縁あって、荒川豊蔵が建設した豊蔵資料館の理事長を私が仰せつかった時に、可児市に牟田洞古窯跡群のある土地と豊蔵資料館を理事会の総意で寄付させていただきます。

それを機に、発掘調査が決まり、美濃桃山陶の謎が解明されていくこととなり、非常にうれしく思っています。また国内の各分野の第一人者の先生方にお集まりいただいたので、しっかりと調査され、保存整備が進むよう祈っています。

なお、私が館長を務めております現代陶芸美術館に9月6日から9月15日まで、久々利大萱の牟田洞窯で焼かれたといわれる国宝志野茶碗銘「卯花塙」が、400年の時を経て美濃に初めて里帰りいたします。



委員長 榎本 徹
(岐阜県現代陶芸美術館館長)

大窯の構造を明らかに

近年の城郭遺跡などの発掘調査でも美濃桃山陶が出土しています。しかし、美濃桃山陶がどんな窯で焼かれたのか、どれぐらいの規模だったのか、といった遺跡としての内容は、まだ詳細に分かっていません。

学術的な調査としては、窯が何基あるか、使われていた期間はどれぐらいか、窯が作られた順番はどうか、工房の跡はあるかなどを調べることが重要です。つまり、全部掘って調べるのではなく、できる限り遺跡を壊さずに掘って調べることが重要です。保存をしかりとした上で、最終的には公開していくことが求められています。

物原が幅70mぐらいあり、範囲がかなり広い遺跡です。全国的にも注目されている調査ですので、しっかりと取り組んでいきます。



副委員長 藤澤良祐
(愛知学院大学 文学部教授)

新しい価値付けを

牟田洞窯と窯下窯は、美濃の桃山茶陶を焼いた窯の中でも重要な窯です。窯下窯はかつて文禄2年(1593)銘の黄瀬戸が出土し、牟田洞窯は荒川豊蔵が志野の陶片を発見したことで、志野の中でも最も優れたものを焼いた窯としても知られています。今回の調査では、二つの窯に共通の窯印のある匣鉢が見つかり、両者が極めて密接な関係にあることも分かりました。この窯印は弥七田窯からも同じものがあるという事です。これはそれぞれの窯としての興味と「窯」それらがひとつの群として存在したという事は、窯業遺跡としての意味がさらに大きくなると思います。

今後、これらの窯の製品が京都などの畿内へ、木曾川を使うことで運ばれたのが、流通面でも新たな成果が期待されます。もう一方で、荒川豊蔵の窯が牟田洞窯に築かれ現代における陶芸の原点となったことも、大きな意味があると思えます。



東京国立博物館学芸部長 伊藤嘉章



平成25年度の調査成果

牟田洞古窯跡

- ・窯の数 4基
- ・窯の大きさ(最大) 推定全長6.7m 最大幅が約2.8m
- ・遺跡の範囲 南北70m程度
- ・出土品 黄瀬戸・瀬戸黒・志野などの桃山陶、すり鉢や皿類などの日常食器、匣鉢や土などの窯道具

窯下古窯跡

- ・窯の数 2基
- ・窯の大きさ 両窯跡とも幅約2.8m
- ・出土品 瀬戸黒・志野・嵐志野・黄瀬戸などの桃山陶、天目茶碗、灰釉製品、鉄釉製品



出土状況

窯下古窯跡から出土した天目茶碗



灰釉小天目 (窯下古窯跡)



筒形碗 (窯下古窯跡)



黄瀬戸陶片 (牟田洞古窯跡)



志野陶片 (牟田洞古窯跡)



天目茶碗と匣鉢 (窯下古窯跡)



すり鉢 (窯下古窯跡)



記号のある匣鉢 (窯下古窯跡)



小分炎柱 (窯下古窯跡)



今年度の調査について

今年度の調査は、牟田洞古窯跡と窯下古窯跡で目的を分けて調査を行います。

牟田洞古窯跡は、約400年前の陶工たちが陶器をつくるなど作業していた場所がどこにあるのかを探ります。通常は尾根の上にあるといわれており、牟田洞古窯跡でも尾根上に平坦な場所がみられます。また、この時期の窯には窯の左右どちらかに製品を出し入れするための取り出し口がついたため、その取り出し口の場所を探し、窯跡付近の作業場も検討します。

窯下古窯跡は、昨年度の調査で2基の窯跡があることが分かっています。その窯跡の構造を調べるために窯の一部を調査します。天井が落ちて壊れた窯ですが、壁や床の残り具合を調べたり、当時の窯の大きさや傾斜、煙出しの部分はどのような構造になっているか、分炎柱や小分炎柱の構造などを調べます。

同時期の美濃の窯は、今までに数基が調査されており、窯の内容が分かっている部分もありますが、可児市ではこの時期の窯を掘るのは初めてなので、他の窯との比較が期待されています。

国史跡指定を目指して

牟田洞古窯跡、窯下古窯跡は、優れた桃山陶を生み出した窯跡というだけでなく、作業場、物原などが残るなど窯業

市民の関心も高まる 牟田洞古窯跡発掘調査現地説明会



約200人が参加



発掘調査の状況を熱心に聞く参加者

遺跡としての評価が高いものです。また、両窯跡は陶器をつくった陶工集団の活動単位を考える上で、距離的にも時期的にも重要であり、窯跡をとりまぐ合や尾根の自然地形があまり壊れることなく保たれていることは、古窯跡群の立地条件を物語る重要な要素です。

国史跡の指定を受けるといことは、国の歴史を語る上で欠かせないという意味があり、約400年前の先人達が残した大きな足跡を後世に伝えていくために大切なこととなります。

大萱古窯跡群は、地形や出土遺物から「群」としてつながりがあり、歴史的価値が高い窯跡群です。指定を受けることができれば、美濃桃山陶を焼いた窯跡では土岐市の元屋敷古窯跡に次いで二例目になります。

調査は、窯跡の調査だけでなく、各地の遺跡で出土しているものや伝世品と比較することも可能になり、期待が膨らみます。



藤澤副委員長から説明を受ける近隣市町村の学芸員たち

問合先 教育文化財課